



じょうもんじだい

縄文時代の人々は、どんなくらしをしていたの



自然をおそれながら、自然のめぐみを受けて、四季の変化に合わせたくらしをしていたんだよ。

移動して、食べ物がある土地に住みついた

縄文人は、食べ物をさがしながら、仲間とともに移動しました。かりや漁につごうのよい、海や川に近い台地を見つけると、そこに集落をつくって、住みつきました。住まいは、地面に深さ50センチメートルほどのたてあなをほり、4～6本の柱を立ててつくる、たてあな住居です。

四季の変化に合わせたくらしをした

縄文人は、かりをしたり、魚をつったり、貝や木の実をとったりといった方法で、食べ物を手に入れていました。春は、野山で山菜や木の新芽をとり、海ではあさり・はまぐりなどをとります。夏は、海や川での魚とりがさかんで、まぐろ・かつお・まだい・すずきなどをとります。秋は、山でどんぐり・くり・くるみ・ぶどうなどをとる仕事が、いそがしくなります。冬は、しか・いのししなどのけものがりが中心になります。

自然をおそれ、いのりをささげた

縄文人は、大雨・あらし・山火事などの天災を、たいへんおそれました。一方で、いちばんのなやみだったのは、病気とけがでした。医者も薬もなかったので、おまじないをしたり、いのったりするほかに、身を守る方法がなかったのです。そのため、病気に対するていこう力が弱い乳児・幼児の死亡率が高く、縄文人の平均寿命は、30歳くらいだったといわれています。全国各地の縄文時代の遺跡から出てくる土偶には、子どもが無事に生まれるようにとか、けがが治るようにといった、おまじないのために使われたと思われるものが、たくさんあります。